

課題研究部門①人との関わり
「いいとこさがし」で育まれる伝え合いと協同性

子中保育園 大野亜海・大塚裕子

1. 概要

本稿は、2019年8月に5歳児(年長)たちのクラスに荒れた雰囲気が生じ始めてから、その状況に対して、担任保育士ならびに他保育士たちが行った問題解決のプロセスをまとめたものである。

問題解決の中心的な柱となったのが「いいとこさがし」という対人関係の改善や構築を目的としたエクササイズの継続的実践である。この実践は、2019年9月下旬から11月上旬にかけて行われた。実践の背景となった子どもたちの状況、実践の進め方および流れについて示す。また、子どもたちの反応と変化、ならびに保護者の反応については、第一筆者の記録に基づく事例により考察する。実践を通した子どもたちの変化については、担任保育士である第一筆者の記録、および他保育士たちによるふりかえりにおける発話に基づいて示すことにより、現場の視点を重視する。

2. 実践の背景

2.1 5歳児クラスの背景

2019年8月の月上旬頃から5歳児クラス全体に荒れた雰囲気が生じ始めた。具体的には、表情の硬さ、友だちの言動に関する保育士への言いつけ、少し意地悪に感じられるような言動、落ち着きの無さ等である。特定の子どもに毎日このような状況が見られるのではなく、日々、5歳児の誰かの言動が気になるという状況が続いた。第一筆者である担任の大野および他の保育士もこの変化に気づいており、気になることがあれば共有しようと職員間で話し合っていた。

8月の第二週はお盆で休む園児も多かった。お盆が明けると、先に述べたような荒れた雰囲気が一つ一つ明確な問題点として浮かび上がるようになった。5歳児のひとりが他児に暴言や脅しのような言葉を述べた。別の5歳児は0歳児や1歳児に対してもきつい口調と表情で文句を言った。また、ある5歳児が他児に挨拶されているのに無視する様子を見て保護者が苦言として保育士に伝えてきた。このような状況が8月下旬まで続いた。職員全員でこの件を共有し、暴言や無視をしてしまう子、それらを受けた子の双方に対して、より受容的に向き合いつつ、子どもたちの話をよく聴くこと、スキンシップを取ることなどを全員で話し合った。

2.2 担任の認識

大野は子どもたちの8月上旬からの状況の一因が自分にあると認識していた。保育士として4年目を迎えた今年度、以前に比べて保育士としての専門性について深く考えることも多く、どのように保育を行ったらよいか迷いが生じて心理的に余裕が無くなることもあった。保育が楽しくないと感じてしまう日も生じた。

他の保育士たちと問題点を共有してから、まずは難しく考えずに、笑顔を絶やさないと、5歳児たちと過ごす時間を増やすことを心掛けた。当園は異年齢保育を行っているため、他の年齢クラスとの合同保育も多いが、この時期は意識的に5歳児だけの活動を行うようにした。この意識と態度の変化で子どもたちの様子は少しずつ変わり、9月中旬頃から言いつけや意地悪に感じられる言動も少しずつ減ってきたと感じられた。

2.3 「いいとこさがし」というエクササイズ

第二筆者の大塚は主任として、7月24日に保育士たちを対象に「いいとこさがし」[國分他2001a]という活動を園内研修で行った。「いいとこさがし」をはじめとするショートエクササイズは、構成的グループ・エンカウンターの実践法である。構成的グループ・エンカウンターとは、人間関係の改善や構築のための集団的カウンセリングの一つの方法論である[國分他2001b]。[國分他2001a]に紹介されている「いいとこさがし」は、自己受容や他者理解をねらいとして、文字が書けるようになった子どもから大人までを対象に行うもので、次のような手順が示されている。

- ・記入用紙を配布する
- ・グループのメンバーについて、相手の良いところだと思った「事実」と自分の「感想」を書く
- ・用紙を回収して教師が目を通す
- ・用紙を書かれた内容の本人に配る
- ・もらったカードを読んで感想を話し合う

当園でも、同僚である保育士同士がより安心して協力し合えることや、保育士ひとり一人の自己肯定感を高めることを目的に行った。また、手順については教師役を設定せず、お互いの良いところを書いた付箋紙を直接相手に渡すことにした。良いところについても、思いついたこと一件につき一枚の付箋紙に書くこと、かつ、何枚も書いてよいことにした。これにより、人が認めてくれた自分の良いところを多く目にするができる。また、多数の人によって指摘される同じ「いいとこ」は自分の強みと認識することができる。

この研修は、お互いや自己の良さの再発見になり、保育士たちにも評判がよく、実践中も笑顔が多いものであった。大野にとっても、この研修は自信になるとともに、嬉しさや他者への感謝を感じるものであった。

9月に入り、自分や他保育士の関わりによって少しずつ、5歳児たちは変化したが、大野はこの実践を行うことにより、子どもたちにもさらに変化が生じるのではないかと考えた。他者に認めてもらえる、あるいは他者の良さを見つける嬉しさを5歳児にも感じてもらいたいと思ったためである。

2.4 もいわ幼稚園の「宿題」という活動

8月30日に、当園の桑田保育士が札幌市立もいわ幼稚園の実践提案研究会という見学研修に参加した。その際に学び、自分たちの保育実践に取り入れたいと考えたのが子どもたちに出す「宿題」だった。「宿題」とは、もいわ幼稚園の独創的な取組みで、年に何度か、例えば「こ

の一週間で×回、お母さん・お父さんと手をつないで出かけること」などのように、家族で、あるいは親子で行ってもらう活動である。園の活動に関心をもってもらい、保護者を巻き込むことをねらいとしている。

桑田は、この取組みに感銘を受け、当園でも取り入れたいと考えた。その際、幼稚園と保育園という違いも踏まえ、保護者が実行するのに困難や負担を感じず、かつ頻繁に行えるような規模の活動を選んだ。9月9日、5歳児に対して初めて次のような「宿題」を出した。

「明日、どんな時でもいいから、大好きな人とグュー(ハグ)してきてね」

翌日10日、子どもたちがこれらの「宿題」の結果について、自ら生き活きと語る様子を見て、大野は桑田から「宿題」を出す役割を引き継ぎ、子どもたちとの会話から、

「みんなが生まれたとき、どのくらい大きかったかお母さんやお父さんから聞いてきてね」
「小さい頃、どんな子どもだったのか」

といった質問を保護者に尋ねてくることを「宿題」とした。この後者の質問は、自分たちの良いところや困ったところなどを尋ねてくるものだったため、後で子どもたちが「いいとこさがし」をする際の練習にもなった。

3. 5歳児クラスにおける「いいとこさがし」の実践

3. 1 「いいとこさがし」の実践の流れ

9月20日(金)に初めて「いいとこさがし」を行った。[國分他 2001a]との違いは次の点である。

- ・一回に一人の良いところを他のみんなでそれぞれ挙げる
- ・挙げられた良いところを大野がホワイトボードに書き示す(図1)
- ・「いいとこさがし」の対象児からも質問や意見を言うことを可とし対話的な場にする
- ・挙げられた良いところは模造紙に表としてまとめ、後からいつでも見られるようにする(図2)

子どもたちが方法を理解するため、まずは大野を対象とした「いいとこさがし」で練習することにし、子どもたち一人ひとりに大野の良いところを挙げてもらった。子どもたちは、

「困っているとき助けてくれる」
「一緒に踊ってくれて楽しい」
「車が来たらみんなを守ってくれる」

など発言することができ、実際に「いいとこさがし」ができそうだと感じられた。この日に、5歳児8名の「いいとこさがし」の順番と日程を決めた。週一回一人ずつ実施することにした。日程は名前カードをトランプのようにめくって決めた。決めた日程はカレンダーに書き込み、子どもたちが



図1 「いいとこさがし」実践イメージ
(写真は別日に実施したもの)



図2 「いいとこさがし」の共有

いつでも確認できるようにした。子どもたちは各家庭で「いいとこさがし」の話をすぐにしており、週明けに話題にする保護者もいた。子どもたちの期待感が感じられた。

実際に、子どもたち同士で行ってみると、良いところの意味が十分に理解できておらず、

「一緒にあそんで楽しかったからよかった」

のように、表現する子どももいた。このときに、理解の助けになったのが、2.4節に示した「小さい頃、どんな子だった？」の「宿題」を思い出させることだった。

3.2 「いいとこさがし」を楽しみにする子どもたち

子どもたちは、この活動をおおいに楽しみにし、保育室でカレンダーを見ながら、あるいは家庭で家族と、話題にしていた。

<事例1 カレンダーを見ながら語り合う>

「いいとこさがし」に対する期待感が高いため、子どもたちがよく話題にするようになった。

A 「もうすぐ僕のいいところ探した！」

B 「あと1、2、3…」

C 「ここはハロウィンパーティでしょ？パーティが終わったらBちゃんのいいとこさがしだね！」

B 「うん！なんか忙しいね」

C 「だけど、たのしみだよね」

そして実際に、初回に決めた日程をカレンダーで確認しながら話し合っていた(図3)。この活動を通して、カレンダーを活用するということを子どもたちが学んだように感じる。これらはスケジュールを俯瞰することにつながる。子どもたちが先の予定に対して見通しを持つ発話をするようになった。「いいとこさがし」だけでなく、10月に行われた遠足に向けてもカレンダーによる日程の確認が見られた。



図3 カレンダーを見ながら話題にする子どもたち

<事例2 自分の順番の日が休みで落ち込む>

Dのお迎えの際、Dの表情が曇っており元気の無い様子であった。

D 父 「明日って何かあるんですか？家で『休みたくない』って言ってたんですけど」

大野 「もともとDのいいとこさがしの日だったんです。休むからできなくなっちゃうと気にしてたんですね」

D 父 「あー、そういうことか！」

大野 「(Dの顔を見て)違う日にやるから大丈夫だよ」

D 「わかった」

Dは少し安心したように、納得して帰っていった。この事例から、「いいとこさがし」は子どもたちにとって、行事と同様に期待の大きい、大切な活動となっていることがわかる。

<事例3 期待を言語化する>

E のいいとこさがし当日、子どもたちは次のようなやりとりをしていた。
E 「みんな、今日、E の『いいとこさがし』だけど、考えてきてくれた？」
A 「考えたよ！」
B 「もう私はとっくに考えてる！」
E 「え～(笑顔がこぼれる)、楽しみにしてるね」

自分の期待感を言語化して友だちに伝える姿、その期待にこたえるように準備していることを伝える姿がこのやりとりに見られる。また、このやりとりから5歳児同士がお互いを大切に考えていることを伝え合う姿を感じる。

3. 3 具体的で感性豊かな表現への変化

次に示すのは、F に対して子どもたちが挙げた「いいとこ」である。F のいいとこさがしは7番めに実施された。初期は「おもしろい」や「やさしい」といった一般的な表現も多かったが、次第に「いいとこ」を感じる状況や場面を具体的に示す表現が増えてきた。

- ・はさみの使い方が上手
- ・優しくてかわいい
- ・マットのブリッジが上手
- ・お絵かきが上手
- ・レゴのものをつくるのがうまい
- ・包丁を使うのが上手
- ・いつも明るい

3. 4 友だちの「いいとこさがし」も大切に

<事例4 欠席した日の「いいとこさがし」も伝える>

10月15日に行われたEの「いいとこさがし」の日、Gは欠席した。三日後の18日の昼食中、二人は次のような会話をしていた。
G 「そういえば、Eのいいとこさがししてもうやったの？」
E 「もう、終わったよ」
G 「ぼく、考えてきたんだけど言ってもいい？」
E 「え～」(Eは照れたように大野の顔を見る)
大野 「もちろんいいよ」
G 「いつも良い服、着ていることと、お話するのが上手」
E 「ありがとう、G」

自分が休んだ日の「いいとこさがし」について、休んだけれど考えてきたこと、後日本人に伝えようとするなど、保育士の指示があるわけではなく、自主的な判断と行動である。自分の「いいとこさがし」を楽しみにするだけでなく、友だちの「いいとこさがし」も大切にしていることが

わかる。

<事例5 延期になっても不満でなく期待を表明する>

予定していた A の「いいとこさがし」の日は欠席者が多かったため延期とした。カレンダーを指差しながら、A は次のように話していた。

A 「今日、僕のいいとこさがしの日だったんだけど、E と F と H が休みだから、この日になったんだって」

C 「うん、じゃあこの日までに考えなきゃ！」

H 「あと 3 回寝たら、A だね」

延期になっても落ち込むのではなく、前向きにとらえている。また、C や H も延期の話をする A に対して、同じようにポジティブに捉え、A を励ますように表現している。

3.5 保護者の反応

5歳児の保護者全員、「いいとこさがし」のことを子どもたちから聞いており、送迎時の話題にのぼることが多かった。

<事例6 「いいとこさがし」から会話が広がる>

C 母 「いいとこさがしのこと、家でも言ってます」

大野 「何て言ってます？」

C 母 「すごい楽しみにしてて、他の年長さんのこととかもよく話してくれるんです」

<事例7 友だちとの関係が見える>

A のお迎え時、母から「いいとこさがし」について話し始める。

A 母 「昨日、A のいいとこさがしだったんですか？もう一週間前から楽しみにしてたんですよ。なんか、昨日は、僕の良いところを『〇〇ちゃんが～と言ってくれた』とか『〇〇くんは～言ってくれた』とか、全部話してくれました」

A 母 「みんな、よく見てくれてるんですね。なかなか友だちの良いところって言うこともないから本当にいいな～って思ってた」

「いいとこさがし」の実践は、保護者に対しても下記のような良い影響があると感じられた。

- ・子どもの楽しそうな姿を見られる
- ・子どもたちが友だちのことをよく話す
- ・自分の子どもについて、他の子どもたちがどのように見えているかを知れる
- ・他の子どもたちに対する関心が高まる

<事例8 「いいとこさがし」の伝播>

大野 「B から聞いたんですけど、お家でも良いところ探しをやってきてるんですか」
 B 母 「あ、そうなんです(笑)ちょっとだけ」
 大野 「何がきっかけで始まったんですか」
 B 母 「B がお友達の良いところを何しようかなって迷ってて、人それぞれ良いところたくさんあるでしょうっていう話から、家族の良いところを始めたんです。家族みんな違かったから、お友達それぞれ違うよって話になったんだよね」
 B 「うん！」
 B 母 「私もやってもらったけど、結構嬉しかったです」
 大野 「あ！それすごいわかります。私もやってもらったんです」
 B 母 「お家でも話してました、大野先生のこと」

このエピソードは、私たちにとって非常に嬉しいものであった。保護者が園の活動に興味関心を持つだけでなく、実際の行動に結び付けてくれたことである。さらに、会話にあるように「良いところはお友だちそれぞれ違う」といった多様性の受容へと深めている。

2. 4節のもしわ幼稚園の「宿題」同様、「いいとこさがし」は、保護者と園とをつなぎ、保育実践により一層、興味関心を持ってもらう媒介となり、さらに子どもたちの育ちや学びを深める要にもなった。

4. 考察:子どもたちの変化

4. 1 担任によるふりかえり

11月5日、5歳児たちの「いいとこさがし」は全員分を終了し、子どもたちは大きく変化した。4. 2節で他の保育士たちも指摘しているように多様な変化がある中、担任である大野がとくに際立って感じたのが、自分たちで話し合っ物事を決めようとする態度が身についたことである。

10月18日に、ハロウィンの飾り物を制作する際、造形時に利用する空き箱などの廃材について、同じ素材が人数分は無いため、誰がどの廃材を使うかを決める必要があった。

大野 「同じ廃材が人数分ないんだけど、どうやって決めようか」

子どもたち 「みんなで話し合っ決めてる」

そういって、自主的に輪になり話し始めた。E がファシリテーターとして、みんなの話に耳を傾けながら進行を進めた。ファシリテーター役の E も自然発生的に自分の役割を担ったが、他の子どもたちも、E のサポートをする子、他者の意見を聞き落とさず拾う子、全体の話聞いて応答をする子、多数決の際に人数を数えて意思決定を確認する子など、全員がファシリテーターの役割を自主的に分担して進めるような話し合いであった(図4)。



図4 話し合う子どもたち

以前であれば、数の足りない廃材に対して、「ぼく、これ！これがいい」「わたし、こっち」と自分の意見ばかり主張していた。それに対して、今回の話し合いでは、「ぼく、これが良いだけ

ど、どう？」「〇〇ちゃんは何がいい？」「(本当は牛乳パックが良かったけど)じゃあ、これでいいよ」のように、相手の意見を受け入れるだけでなく、譲り合いも話し合いながら行っていた。

今回の話し合いの中では友達同士で話し合うことをしっかり理解しながら廃材を決めることができていた。「いいとこさがし」を繰り返す中で、他者の気持ちを考え、共に問題を解決しようとする共同性や伝え合いの力[無藤 2018]を身につけることができたと感じた。

4. 2 保育士たちによるふりかえりの共有と深まり

「いいとこさがし」が終了した11月5日、保育士5名と大野とで「いいとこさがし」の実践を通して見られた子どもたちの変化についてふりかえりの話し合いをした。2. 1節に挙げていた5歳児の状況が解決されたことを示すことばを多く共有することができた。表情が柔らかくなった、穏やかになった、困っていると自然に助けるようになった、互いに関心が深まった等である。さらに、下記のように、具体的な状況とともに、より多くの成長が見られるようになった。

- ・友達の悪いところを指摘することが多かったが、小さい子に対し、優しい声掛けをしている場面を多く見る。
- ・以前は保育士からの発信で2歳児のお布団を片付けていたが、最近では自分たちで気づいて手伝ってくれている。これまでは「やってあげたよ」と自分の姿をアピールし、「ありがとう」の言葉で気持ちが満足するという姿だった。最近では、そういったアピールがなくなり、自主的な優しさでやってくれていることが感じられる。
- ・思いやりや親切を示す対象が自分のクラスだけではなくなった。諍いもなくなった。自分たちより小さい子どもたちに対しても、ただ「ダメ！」と怒るのではなく、理由をつけたり、条件をつけたり、交渉をするようになった。相手の気持ちを考えながらも、自分はこうしたいと対話的になろうとする姿が見られている。年長から他クラスへ良い影響として伝わっている。
- ・対話的になった。困りごと、トラブルでも子ども同士で話し合っ解決している。仲裁に入る役割も自分たちでしている。いいとこさがしを始めてから穏やかな空気になった。注意することがない。

子どもたちの良い変化を共有する一方で、自分たちの保育への課題を見つけるふりかえりにもなった。「いいとこさがし」を行ったことで、自己肯定感の醸成に結びついて、このような変化が生じたのだとすれば、これまで保育の中で、子どもたちにとって嬉しいことを言われたり、実感したりする体験が十分でなかったということである。これについては大人が反省するべき点として上がった。

5. まとめ

「いいとこさがし」という活動は、子どもたちに大きな変化をもたらした。子どもたちの関係構築に効果的であることは間違いないと感じている。しかし、私たちはこの活動を万能薬のように捉えているわけではない。「いいとこさがし」を始める前から変化が生じていたように、担任はじめ保育士全員で5歳児たちの状況に向き合っ情報を共有し関わり方を見直したこと、他園の良

い実践を取り入れたこと、「いいとこさがし」も当園の状況に合うように実践のしかたを変えたこと、「いいとこさがし」がきっかけになって各家庭での子どもとの関わりにも変化が生じたと考えられること、これらが総合的に影響し合い、子どもたちの変化をもたらしたのだと考えている。園全体で、保護者と共に、子どもたちの状況に取り組んだからこそ、保育に万能薬は無いと実感できる実践となった。

参考文献:

[國分他 2001a] 國分康孝監修, 林伸一・飯野哲朗・築瀬のり子・八巻寛治・國分久子編集, エンカウンターで学級が変わる:ショートエクササイズ集 Part2, 図書文化, 2001.

[國分他 2001b] 國分康孝, 片野智治, 構成的グループ・エンカウターの原理と進め方, 誠信書房, 2001.

[無藤 2018] 無藤隆編著, 10の姿プラス5・実践解説書, ひかりのくに, 2018.